

夏目漱石『こころ』

——百年の謎を解く(二)——

藤井 淳

第二章 清沢満之の生涯 (承前) 夏目漱石『こころ』——百年の謎を解く(二) 『駒澤大学仏教学部論集』第四十六号

本論の目的は清沢満之の生涯を紹介することではないが、本章でひとまず清沢の生涯の概略を説明する。その理由は一つには第一章で示した真宗大学の学校騒動と清沢満之の性格・生涯が密接に関係していることを示すためである。もう一つには清沢の生涯の理解なくしては、第三章で漱石が『こころ』で描いたKと実在した人物である清沢満之との比較ができないからである。

清沢満之は近代日本においてあるべき仏教の姿を求めた。それは分野は異なっても近代日本のあるべき姿を求めた漱石の課題と同じものでもあった。漱石はそのような清沢の生涯を象徴する真宗大学の学校騒動の結末から、乃木大将の殉死とは別の、もう一つの「明治の終わり」を感じたのである。

清沢の生涯については吉田久一による『清沢満之』(昭和三十六年、吉川弘文館)に詳しく述べられている。以下の私の記述は吉田の研究に多くを依存しているが、本章では漱石と清沢の関係を理解するために、漱石の生涯との対応を加えつつ清沢の生涯を紹介する。

第一節 清沢満之の少年時代と大学時代

清沢満之は漱石の生まれる四年前、文久三年(一八六三年)尾張藩の下級士族徳永永則・タキの長男として生まれた。その後の清沢の生涯を通じて顕著に見られる強い倫理的性格は少年時代に士族の家で育ち、儒教的素養を受けたことに

基づいていると思われる。また尾張は浄土真宗、中でも大谷派の勢力の強い地域であり、母は熱心な浄土真宗の信者であった。このような少年期の環境が成人した清沢を真宗教団大谷派の改革に生涯忠実に尽くさせることになる素地となった。

清沢満之(幼名は満之助)は幼年時代に塾に通い、十歳の時から寺子屋を改制した義校に学んだ。十二歳の時、名古屋に英語学校が設立され入学する。この英語学校は文部省が設立した七外国語学校の一つであった。清沢はこの時学齢不足で仮入学であったが、成績優秀のため後に本入学を許された。ところが十四歳の時、この英語学校が廃止されたことよって、愛知県医学校に入学する。父は満之を医者にしようとしたらしい。在学中の成績は抜群だった。しかし理由ははっきりしないが、この医学校をすぐにやめている。

ここまでは当時の士族にとって普通に見られる進路であった。しかし、この頃清沢にとって後の生涯を決めることになる話を持ちかけられた。成績優秀の清沢を見込んで、浄土真宗のある僧侶が清沢に育英教校への入学を勧めたのである。育英教校は真宗大谷派が経営する学校であり、いわゆる僧侶養成学校であり、主に寺院の優秀な子弟が集められていた。清沢自身も育英教校に入れば、将来は僧侶にならなければならないことが分かっていたはずである。清沢は当初はお金を出してもらって勉強させてもらえるという理由で入学したのだろう。清沢は後に「自分が育英教校に移ったのは、僧侶となる気があるならば本願寺が奨学生として学問させてやるといつてくれたからであって、当時はまだ法然上人や親鸞聖人のような立派な求道心ではなかった。」と述懐している。とはいえ清沢は一旦決められたことには忠実であり、明治十一年、十六歳で得度を受けて育英教校に入ってから、猛烈に勉強したようで「ビショップ」とあだなされた。

ここでも清沢の才能は高く評価され、明治十四年、十九歳の時に東本願寺は清沢を東京に留学させることにする。「東京に留学」というのは奇妙に聞こえるが、当時日本で近代的な教育を受けるには東京が唯一の場所であった。これは特に清沢に限ったことではなく、東本願寺は他にも数人の僧侶候補生を東京に留学させている。哲学館(東洋大学の前身)を設立した井上円了は留学生としては清沢の数年先輩にあたる。

ともかく清沢は東本願寺から学費を貰って東京に出て、まずは大学予備門に入学した。これは後に第一高等学校になる。予備門時代には首席であった。東京大学時代には特待生に選ばれている。清沢が優秀であったことについては、東

京大で交友のあつた上田萬年（後に東大教授）が「清沢氏の大学予備門及び文科大学（東京大学）在学中は常に首席を占め、其成績は三番と下らないと思はれる。」と語っている。東京大学では哲学を専攻した。このころの哲学教授はフェノロサであつた。清沢はフェノロサからヘーゲル哲学の影響を受けたと思われる。また大学三年の時に『哲学会雑誌』（後の『哲学雑誌』）の初代書記に選ばれている。清沢にとって大学の寄宿舎時代は楽しかつたようで、寄宿舎時代の清沢は親友の沢柳政太郎（後に東北・京大総長と議論した時、沢柳に勝ちそうになつたが、沢柳が癩癪をおこして清沢の耳を引つ張つて机の廻りを連れて歩いた。清沢はそのままどこまでもついていった、という珍妙な思い出を上田萬年が語っている。自分の信じたことを愚直なまでに守り、決して変えなかつた清沢のその後の人生を象徴するエピソードである。

明治二十年、二十五歳で清沢は大学院へ進み宗教哲学を専攻し、そのかたわら第一高等学校で仏国史を教えていた。このころ漱石は第一高等学校予科に在籍し、首席になつていた。しかし当時両者にそれほど面識はなかつたと思はれる。第一高等学校で教鞭をとつて一年も立たないうちに、清沢にとつて生涯の決定的な転機となる話が持ち上がった。当時東京遷都を受けて財政難に陥つていた京都府は、全国の門徒から布施を集め、巨大な財政規模を持つ東本願寺（真宗大谷派）に京都尋常中学（後の府立一中）の経営を委託した。東京大学を卒業していた清沢はその校長に赴任するように東本願寺より頼まれたのである。当時の清沢のいた地位から考えて、清沢が東京に残れば学問界での出世は間違ひなかつたと思われる。しかし清沢は学問界での出世を選ばず、京都市行きを決意する。清沢はその理由として

『身は俗家に生れ、縁ありて真宗の寺門に入り、本山の教育を受けて今日に至りたるもの、この点に於いて余は篤く本山の恩を思ひ、之が報恩の道を尽くさざるべからず』

と言っている。そこには明らかに儒教的倫理から本山に対する報恩を尽くそうとする清沢の性格が読み取れる。

明治の最初期に東京大学に学び近代的教育を受けた清沢にとつて、この京都市行きは近代とはおよそ正反対の性格を持つ仏教団の近代化改革に取り組むことを意味した。清沢は近代日本における仏教のあるべき姿を求めたのである。しかし清沢のこの京都市行きの決断は報われることの無い泥沼にはまり込む道を選んだ時でもあつた。

第二節 清沢満之の禁欲生活

§一 校長赴任

明治二十一年、清沢は京都尋常中学の校長に二十六歳という若さで赴任して来た。そこでは従来の府立学校の生徒と本願寺が送り込んだ新しい僧侶の生徒との間の対立があつたが、そのような学校騒動は当時それほど珍しいものではなかつた。というのも当時の学生は非常に荒っぽいところがあり、清沢自身も東京大学時代に外の多くの学生らとともに騒動をおこして退学処分を受けたことがある。もつとも大学生の清沢がどの程度までこの騒動に関わつていたかは明らかではない。また当時の学生が粗暴であつたことは、漱石が『模倣と独立』の中で自分自身の体験談として

『それが明治二十二年位でした。其時分の事を今の貴方あなたがたに此べると、吾々時代の書生と云ふものは乱暴で、余程よほど不良少年と云ふ傾いき一人によると寧ろむしろ気概があつた。天下国家を以て任じて威張つて居つた。』（18）

と述べていることから分かる。ともかく京都尋常中学での対立は次第に収まっていき、清沢の校長赴任から二年がたち、明治二十三年、宗門の友人である稲葉昌丸が理科大学（後に東京大学となる）を卒業して代わりに校長に赴任することになり、清沢は校長を辞任する。その前の明治二十一年八月、清沢は現在の愛知県碧南市にある西方寺の養子となり、清沢やす子と結婚する。この時まで清沢満之は徳永姓を名乗つていた。このことは優秀である清沢を教団に止めおくために寺門に縁を結ばせようとしたものと思われる。その時に仲人を務めたのが後に清沢と対立することになる保守派の首領、渥美契縁であつた。長男である清沢が他家の養子に入ることについてはいろいろと問題が起きたようである。また清沢が養子になつたのと同じ年には一高在学中の漱石は養子先の塩原家から夏目家に復籍している。この復籍を巡るトラブルは『こころ』の「先生」の遺産相続を巡る体験のモデルになつたとも言われる。また漱石は清沢が養子に入つたことを知つていたはずである。

清沢の生涯に戻る。清沢は京都尋常中学の他に本願寺直属の高倉大学寮に出掛けて哲学を講義していた。この時の講

義をもとに明治二十五年に出版されたのが清沢の最初の代表的著作『宗教哲学骸骨』である。『宗教哲学骸骨』は当時としては非常に評判になったようで、シカゴの世界宗教会議で英訳が発表され好評を博したと伝えられる。また『哲学雑誌』には漱石の友人立花銃三郎の手になる「宗教哲学骸骨ヲ読ム」という書評が載せられている。それは漱石が『哲学雑誌』の委員を務めていたときでもあった。この書評を通じて漱石はKの禁欲生活のモデルとなった清沢の禁欲生活を知ったことは第三章で述べる。

§二 禁欲生活

清沢は校長辞任後も京都尋常中学の教員を続けていた。そして明治二十三年（二十八歳）夏より明治二十七年（三十二歳）に結核が発病するまでの間、清沢はミニマム・ポシブルの実験と自ら名づけた、極端に禁欲主義的な生活を遂行する。このことは清沢のどの伝記にも載せられる特徴的な一時期である。それまで清沢はフロックコートに身を固め、人力車で学校に通っていた。このことは当時の東京大学を卒業した学士としてはそれほど珍しいことではない。漱石が東京帝国大学の講師を務めていたころ、赤門までのわずかな距離を人力車を走らせる漱石の姿を谷崎潤一郎が見てうらやましく思った、というエピソードがある。ともかくそのような「学士様」の生活と打って変わって、清沢は突然に洋服を袈裟に改め、喫煙をたち、肉食を禁止し、妻子を遠ざけ、道義の修得につとめるといふ禁欲主義を実行し始める。この理由を清沢自身は

『宗教的信念に入ろうと思うたならば、先づ最初にすべての宗教以外の事々物々を頼みにする心を離れねばならぬ。（中略）家を出で、財を捨て、妻子を顧みぬと云ふ厭世の関門を一度経なければ、なかなかほんたうの宗教的信念に至ることはできぬであらう。』

と述べている。また清沢の禁欲生活は浄土真宗の伝統的教義と相容れない性格があり、その点を批判されることがある。清沢の当時の禁欲生活について宗門関係の友人は

『明治二十三年八月、徳永（清沢）君は中学校長の職を稲葉に譲りて、大中学の授業は旧の如し。爾来君は専ら僧服を着し、修養を事とし、殊に二十四年十月、母君を喪ひてよりは、白服に麻衣を纏い、一切の肉類を断ち、禁酒禁煙、全く所謂行者の振舞を為せり。』

と証言している。清沢の禁欲主義は徹底したものであったが、それを遂行し得たのは清沢が少年時代に培った高い倫理的な性格に由来すると思われる。

その禁欲生活の最中の明治二十六年三月、清沢は宗門の友人である稲葉昌丸とともに京都尋常中学の教職を辞職する。同年九月に東本願寺は京都尋常中学を京都府に返し、新たに大谷尋常中学を開設したからである。大谷尋常中学には清沢の東京大学時代の親友沢柳政太郎が校長として迎えられた。清沢は自らの厳しい禁欲生活を他人も実行できると考えたのだろうか、麻布・黒袷姿を中学の定服と決めたり、厳格な新学制を定めたりした。しかし清沢・稲葉・沢柳ら東京大学出身者によるこの非現実的な新学制は学生たちの反発を買い、学生たちは同盟休校するという事件を起こした。この時の騒動の処分を担当したのはかつて清沢の仲人を勤めたことのある渥美契縁であった。渥美は保守派を代表する人物であり、渥美による処分は清沢・稲葉らを中心とする改革派にとって厳しいものだった。この事件は清沢を中心とする改革派と渥美を中心とする保守派との対立の端緒となった。最初の学制改革に挫折した清沢はこの頃の禁欲生活の無理や栄養不足がたたって結核と診断され、清沢の禁欲生活は終わりをつける。

明治二十七年四月（三十二歳）に結核と診断された清沢は現在の兵庫県神戸市垂水区にある洞養寺で静養することになる。奇しくも同年二月に漱石は血痰を出して肺結核の初期と診断され、静養にとめることになっている。また漱石が小石川の法蔵院に間借りしたのもこの年である。ともかくこの時期の清沢は生死の淵をさまよいながら、信仰において重要な転機を果たしたと思われる。清沢の信仰は近代日本思想を考えるうえで最も重要なものの一つであるが本論の目的から外れるので一切扱わない。その後、生涯結核に苦しめられつつ、清沢は残りの生涯の全てを真宗大学の教育改革を通じて仏教の近代化改革に捧げるのである。

第三節 真宗大学の学校騒動

第一章第一節では漱石が講演『模倣と独立』において指摘した学校騒動の経過が、清沢が関わった真宗大学の学校騒動の経過と一致するのを見た。また同章第二節で真宗大学の学校騒動の背景となる、保守派と清沢の流れを汲む改革派との対立の構図を漱石が知っていたのを漱石書簡八三四から示した。以下にその学校騒動の舞台となった真宗大学と清沢満之との関わりを解説する。清沢は生涯の最後を真宗大学の設立と発展に捧げ、死後その期待を後人に託したのである。しかしその清沢の遺志は「明治の終わり」に打ち砕かれることになる。

§ 1 保守派との対立

ここで保守派の代表として悪役のように見られる渥美の立場を少し考えておく。当時大谷派教団は火災によって焼失した本願寺本堂の再建などで莫大な債務を抱えていた。渥美はこの難関を切り抜けるために教団内で専制体勢を引きつつ、寺院の格をあげるといふ条件で募財を集めるなどして負債償却に尽力した。渥美の手法は非難されるべき点が多いが、財政窮乏の中で他に選択肢があつたのかどうかを考慮しなければならない。

清沢の生涯に戻る。結核と診断された清沢は療養生活を送り、次第に健康を回復した。そして清沢は再び京都に戻り、渥美契縁を中心とする保守派との対決姿勢を強め、明治二十九年（三十四歳）、清沢は白川党を結成し、『教界事言』という雑誌を発刊して保守派を弾劾しはじめた。この弾劾文について橋本峰雄が『日本の名著』「清沢満之・鈴木大拙」の解説の中で「清沢の主張はきわめてラディカルである。人はおそらく、最近の大学全共闘運動のテーゼを読む思いがするであろう。事実、問題は同じなのである。」と評するのは的を得ている。清沢の運動の結果、全国的な反響があり革新全国同盟会が結成された。この時の清沢の改革は読売新聞などでも取り上げられており、漱石もおそらく知っていたであろう。全国的な改革運動の前に保守派の首領である渥美は辞職を余儀なくされた。一方喧嘩両成敗の形で明治三十年、清沢ら改革派も教団から除名処分を受けた。

渥美に代わって教団の宗政を握ったのが石川舞台であった。石川は清沢の改革運動を支援する形をとったが、大宗政家である石川は現実主義をとり、清沢の理想的改革を実現させることはなかった。石川は政敵である渥美に対抗するための政争の道具として清沢らの改革派を利用したのである。一方失脚した渥美は政権復帰を狙って石川舞台及び石川が

支援する改革派の失敗を待ち構えていた。

§二 清沢満之の近代化改革の性質

清沢の改革は宗教(政治)・教学の二つの点であまりに理想的で、周りから孤立するという性格を最初から持っていた。以下で清沢の近代化改革の性質を概観する。

第一に宗教の面から言えば、当時の大谷派教団は法主を頂点として全国の末寺・門徒を底辺とする強固な封建的体制に支えられていた。「大谷派は末寺末徒の大谷派ならずして、法主親下の大谷派なり」という言葉はこの当時の大谷派教団の秩序をよく表している。当時は法主が地方を巡錫する時には、法主の入った後の風呂の水を門徒が争って飲む、という話があるほど法主信仰の強かった時代である。改革派は門徒会議を目標に掲げるなどの急激な民主化改革を要求したが、それは当時の教団の秩序を犯すものであった。万一改革派の要求どおりに実現すれば、教団の財政的基盤となっている封建的体制をも崩壊させる恐れがあった。現実政治家である石川は当然のことながら、清沢らを懐柔するために改革を飲むふりをするだけで、清沢らの改革を実行に移すことは無かった。ともかく清沢の改革は当時の時代的背景に對する配慮を欠いたものであった。

第二に教学の面では、清沢は「田舎の門徒は死後極樂へ行くと思っているが、このような俗信ばかりはびこって新鮮な靈光がなければ、真宗の法灯が危うい」という考えを持っていた。しかし当時の教団の基盤である門徒の大多数が望んでいたのは、高踏な信仰の議論ではなくむしろ清沢の否定する「死後極樂へ行く」ことであつたであろう。清沢がいかに一般の門徒に受け入れられなかつたかは(清沢が)お説教をすれば話がむづかしくつてさっぱりわからないから聴衆は皆帰ってしまう。」というエピソードが示している。清沢は「真宗の法灯が危うい」と言っているが、教団の基盤である大多数の門徒の望みを真つ向から否定することこそ、現実的には「真宗の法灯が危うい」くなることであつた。しかし清沢はその自己矛盾に気づくことはなかつた。教団の精神的な柱である教学の面においても清沢の改革がインテリにありがちな偏狭さを持ち、清沢の思想が広がりを見せないのは明らかであつた。保守派は教学の面では改革派の反對に大多数の門徒の意見を代弁する役割を担つた。

清沢の改革は最初から多くの自己矛盾を抱え、改革が失敗に終わったのは当然の帰結であつたと言える。

§三 真宗大学の東京移転——教学の近代化を目指して

明治三十一年（三十六歳）、清沢は東京に上り、大学時代の親友、沢柳政太郎宅に滞在する。この滞在中に清沢は『エピクテタス語録』を読んだ。清沢はこの『エピクテタス語録』に非常な感銘を受ける。このエピクテタスは『こゝろ』の中でKが模範とした「霊の為に肉を虐げたり、道のために体を鞭つたりした」（31）人として描かれていると思われる。明治三十二年、教団から正式に除名処分を解かれた清沢は再び東京に上り、本郷森川町にある近角常観の宿舎に入る。近角は清沢とは信条が完全に一致してはいたわけではないが、同じ大谷派の中でわりあい近い盟友の關係にあつた。清沢はこのころ石川舜台から真宗大学の学監に就任するようという要請を受けた。清沢は真宗大学を東京に移転することや教学を宗政から独立させるといふ条件をつけて学監就任を受け入れた。そして同年には真宗大学の東京移転が正式に決定された。

明治三十四年（三十九歳）に真宗大学は東京に移転する。このことは単に地理的に京都から東京に移転する以上の意味を持つていた。京都にある東本願寺は当時「伏魔殿」と評されるほど権力闘争の渦巻く場所であつた。しかしあくまで「正直」で「単純」な清沢はそのようなどろどろした政争とは性質的に相容れなかつた。また清沢は近代的な教育をするためには伝統的勢力の根強い京都から教学の中心となる大学を切り離す必要があると考えていた。清沢にとつて真宗大学の東京移転は伝統教学に縛られた京都を離れて、近代的な教学を純粹に実行できる機会ととらえられた。しかし保守派にとつてはこの東京移転は憎悪の対象となつた。真宗大学の東京移転は自分たち保守派の存在を否定する行為として映つたのである。

§四 学校騒動の発生

翌明治三十五年、真宗大学に学校騒動が起こる。学校騒動の発生は清沢が実際に経営を任せていた主幹関根仁応と職員・学生との対立が原因であつたが、清沢が真宗大学の学生に要求した態度は明らかに現実的なものではなかつた。『座談』の中には清沢の態度を示すものとして

『清沢』先生曰く。余は学業中にありて、卒業後に於ける衣食の問題を苦慮したることなし。嘗てかゝる思想だにも浮はざりき。今の青年は、徒に成功を急ぎ、いまだ学業の半途に達せざるに、早くも卒業後に於ける衣食の問題を苦慮す。』とある。このように理想的な考えを持つ清沢が真宗大学の最高責任者として学校騒動を収集できるはずはなかった。学生のあるものは「死んでしまつてゐる仏教をどんなに学んだつて、今生きて社会に出るのに何の役に立つか」とも言つてゐる。一方で学生たちは騒動の中で主幹の排斥の他にも教員免状を得られるように文部省の認可を求めるなどの現実的な要求を出している。そのような方向に対して清沢は

『それは以ての外の外的ことである。真宗大学の学生は、其の学校の性質上、純粹の宗教的方面にのみ向かうべきものである。又、是非ともさうなければならぬものである。それ故、強ひて純粹の宗教的方面以外に進路を開くなどは、誤れるの甚だしきもの、たとへ左様の道路ありとも、之は是非閉ぢてしまわねばならぬ。』

と語つてゐる。もはや妥協点は見いだせなかつた。さらに改革派の失敗を待ち構える保守派が背後からこの学校騒動を扇動していたのである。その結果、関根は辞任を余儀なくされ、清沢自身も責任をとつて辞任する。後任の学監は南条文雄であつた。南条文雄は年齢的には清沢より一世代上で、少年期を京都で伝統的教學を学び、保守派と人間的なつながりがあつた。一方で東本願寺からイギリス・オックスフォード大学に留学派遣された経験があるだけに進歩的な所があり、しばしば改革派と歩調を共にしていた。そこでその中立的立場を見込まれて、この騒動の収集役としての役割を担うことになつた。

なお清沢は明治三十四年から「精神主義」という思想運動を自ら中心になつて発行した雑誌『精神界』上で展開する。その清沢満之の「精神主義」の影が『こゝろ』の中でKに投影されていることは第三章で詳しく検討する。

§五 清沢満之の死

学監辞任後、妻・長男を相次いで亡くした清沢は養子先の寺のある大浜（愛知県）に帰つた。清沢は近角常観に「自

分は子供を破壊せしめ、妻を破壊せしめ、学校を破壊せしめ、追つゝけ自分を破壊するであらう。」と語つたという。そして翌明治三十六年、再び上京し、清沢は結核に倒れて、享年四十一歳の生涯を閉じた。明治を「真面目」に生き抜いた最初の近代人の最期であつた。死ぬ六日前に書いた『我が信念』が絶筆となつた。この清沢の遺書とも言える『我が信念』は『こゝろ』の中でKの遺書として漱石による再解釈を受ける。

清沢満之は近代的教育を受け、新しい生き方を送れたにもかかわらず、もはや過去のものともいえる仏教教団に立ち戻り、近代的教學を中心とする近代化改革を試みた。清沢の一生は近代日本における仏教再生に捧げられたといつても過言ではない。しかし明治を「余りに正直」に「余りに単純」に(42)生き抜いた清沢の努力はその後報われることはついに無かつた。以下清沢が死後に希望を託した真宗大学のその後を見て行く。

§六 騒動の拡大

真宗大学を巡る学校騒動における両派の対立は学者肌の新学監南条文雄が収められる性質のものではなかつた。この頃保守派と改革派が真宗大学の運営を巡つて水面下で暗闘を続けていたことを漱石書簡八三四(明治四十年)が物語っているのを第一章第二節で見た。ここでは真宗大学の経営に携わつていた改革派(当局者)はキリスト教にも理解を示していたが、キリスト教信者を真宗大学の教員に採用するに当たつて、保守派(京都の頑固連)に足をすくわれないうに腐心していたのである。

§七 「失敗」 — 真宗大学の京都再移転

清沢の死後、緊迫した状況の下に保たれてきた両派のバランスはついに崩れる。真宗大谷派教団の本拠地のある京都の東本願寺では石川舜台が失脚し、改革派と対立する保守派が実権を握るといふ事態が起つた。改革派を権力闘争に利用して、支援していたのが石川舜台である。したがつて石川が失脚した後、渥美を中心としていた保守派の圧力に、理想的で教団内に広い支持を持たず、また清沢という精神的柱を失つた改革派が抗することは到底できることではなかつた。財政的裏付けを断たれた改革派は大学の運営権をも失つた。その結果、保守派により真宗大学の京都再移転が決定され、明治四十四年十月に移転が行われた。これも単に地理的以上の意味を持つていたのは明らかである。保守派

の改革派に対するあからさまな報復であった。学監南条文雄は辞任し、清沢の流れを汲む改革派の教授陣も辞任した。それは保守派の勝利・改革派の敗北を意味した。この時に今は亡き清沢が真宗大学に託した希望は打ち砕かれた。その後、清沢の期待した形で真宗大学が再興されることはついになかった。その真宗大学の再移転は清沢の死から九年を経ずに起こったのである。漱石が真宗大学に教員を周旋したときから四年後のことである。漱石にとっても予期出来ないほどの早い清沢満之の遺志の破綻であった。その後一年も経ることなく、明治は終わりを迎える。

第一章　まとめ

本章では清沢の生涯を清沢の死後の真宗大学の経過と共に略述した。本章で見たように真宗大学の学校騒動の経過と失敗は清沢の人生と密接に関わっている。

清沢満之は明治日本の近代化を先頭に立って担った東京大学で学んだ。もし清沢が明治学問界に止まれば高い地位につけることは確実であっただろう。しかしその地位を捨ててまで、近代とは相容れない性質を持つ仏教教団という場に立ち戻り、仏教の近代化改革を試みた。清沢満之はあくまで近代日本における仏教のあるべき道を求めたのである。

その清沢の一連の近代化改革を振り返ってみて、まず気づくことはそれらの改革がことごとく失敗に終わったことである。その最も大きな理由は清沢の改革があまりに理想的で現実を見ていなかったことにある。清沢は死後、自分の後継者である改革派に真宗大学を通じた近代的教学の確立を託した。しかしその改革派もやはり現実的視点を欠いて真宗大学の京都再移転という事態を招いた。そして明治四十四年十一月というまさに明治が終わろうとする時に起きたこの真宗大学の再移転事件は明治を「余りに正直」に「余りに単純」に(42)生き抜いた清沢満之の遺志の破綻として、漱石に乃木大将の殉死とは別の、もう一つの「明治の終わり」を強く感じさせたのである。(続く)

以下の雑誌に掲載予定である。

夏目漱石『こころ』―百年の謎を解く(三) 『駒澤大学仏教文学研究』第十八号

第三章第一節、第二節

夏目漱石『こころ』——百年の謎を解く(四) 『駒澤大学佛教学部論集』第四十六号(一)～(四)の注をまとめて付す予定である。

第三章第三節 明治の異端

第四章 『こころ』解釈

本論文は二〇〇〇年に筆者が当時東京大学文学部インド哲学仏教学部研究室に所属していた際に末木文美士教授(現・国際日本文化研究センター教授)に提出した原稿を元に内容はほぼ変えず、題を改め、様式を調べたものである。本論文の一部要約として「近代日本の《光》と《影》——夏目漱石と清沢満之」『文学』(二〇〇一年三・四月号、岩波書店)に掲載している。

(本稿は平成二十六年年度日本学術振興会科学研究費(若手B・課題番号25870725)による研究成果の一部である)